

ツヴァイクの日本語新訳：『過去への旅／チェス奇譚』（2021年）

杉山有紀子

私は現在横浜にある慶應義塾大学でドイツ語教員として勤務し、またドイツ語文学研究者としては20世紀オーストリアの文学を主な研究対象としている。シュテファン・ツヴァイクは高校時代から好きな作家で、それがドイツ語文学を専攻することを決意した理由でもあった。大学時代に国際シュテファン・ツヴァイク協会のメンバーになった。ツヴァイクはまた間もなく私をザルツブルクへも導いた——2010年に初めてこの地を訪れ、ツヴァイク協会会長のヒルデマール・ホル氏に会った。そして2012年から2015年までザルツブルク大学に留学し、2016年にシュテファン・ツヴァイクにおける「内面の自由」理念をテーマとする博士論文で博士号を取得した。今日に至るまでこの作家は私にとって常に中心的存在であり、ザルツブルクは今も私の第二の故郷であり続けている。

これまでのツヴァイク日本語訳

17歳だった私はもちろんツヴァイクを日本語で読んだ。日本ではツヴァイクはよく知られている作家とは言えない。彼の『マリー・アントワネット』にインスパイアされたという漫画『ベルサイユのばら』（池田理代子作）が有名である程度だ。日本語の全集（みすず書房、全21巻）はあるものの、50年以上も前に出たもので、今日では図書館か古書店でしか手に取ることができない。私もこの全集を読み、今回訳した「チェス奇譚」ももちろん収録されていて、非常に強い印象を受けた。

ただこの全集にはいくつかの非常に重要な作品、例えば『エレミヤ』やいくつかの短編、エッセイ等が欠けており、書簡は全く収められていない。また後に知ることになったように、日本にはつい最近までツヴァイクの専門家がほとんどおらず、それどころか（これはドイツ語圏でもいくらかそうかもしれないが）独文研究者の多くが彼を「二流の娯楽作家」とみなしていた。全集の翻訳者は有名な独文学者たちではあったが、その全員がツヴァイクの文学に対する高い関心を持っていたわけではない。人によっては後書きの中でツヴァイクへの軽蔑を示唆してさえいる。自分の翻訳する作品を、愛するまではいかなくとも少なくとも敬意をもって理解する姿勢なしには、本質に至ることはできないだろう。また純粋に技術的な面でも、全集は古い翻訳に特有の文体が今日の読者にとっては必ずしも読みやすいとは言えないものとなっている。

二つの小説の新訳

そういうわけで私はずっと自らの翻訳を世に出すことを夢見てきた。そしてこの度、ある

東京の出版社（幻戯書房）の外国文学叢書に一卷を加える機会をいただいた。この叢書には既にツヴァイクの『聖伝』（「第三の鳩の物語」「永遠の兄の眼」「バベルの塔」「埋められた燭台」、宇和川雄・籠碧訳）が収められていた。同世代の研究者たちがツヴァイクに関心を持ち、このような成果を上げているという事実は一方で私を非常に勇気づけた。

他方で私はツヴァイクをまた別の観点から紹介したいとも思った。彼の作品の中で自分自身が最初に読み、魅了されたのが短編であったことから、このジャンルをまず選んだ。そしてフィクション作品に焦点を当てるならば、「チェス奇譚」は外せないと考えた。この小説は日本でも多少は知られている（といっても外国文学に関心のある少数の人々の間ではということだが）。全集に収録された日本語訳も決して悪いものではない。ただやはり今日の目からは多少古びており、いくつかの明らかな誤りもある。新訳によってこの古典的作品を改めて蘇らせることは有益だろうと考えた。

「チェス奇譚」だけでは一冊にするのに短すぎるため、テーマと長さの上で合うと思われる「過去への旅」（別題「現実の抵抗」）を組み合わせることを思いついた。「過去への旅」はまだ日本語に訳されていない。「チェス奇譚」にはロマンティックなエピソードが一切ないのに対し、「過去への旅」はドラマティックな愛の物語である。といって決して単なるメロドラマではなく、ツヴァイクらしい戦争とファシズムのテーマも含んでいる。未完に終わっているという事実も、あるいは読者の想像をかき立てる効果となるかもしれないと思われた。

ドイツ語から日本語へ

東京を離れることができなかつた 2020 年夏に翻訳を進めることができた。ツヴァイクのドイツ語は外国語話者にとっても比較的理解しやすいものではある。彼のテキストはあらゆることを様々な角度から、数多くの形容詞を使って語り、その過剰なまでに徹底的な描写は誤解あるいは二義性の余地をほとんど残さない。それでもあらゆる表現を日本語に移していくというのは非常に難しいことであつた。その大きな理由はドイツ語と日本語が文法的に非常にかげ離れている点にある。近代日本語は、ドイツ語を含む西洋語の翻訳を通してそれまでの言語が大きく形を変えることによって成立したものである。それでも根本的に全く異なつたシステムを持つ言語であることに変わりはない。

あるドイツ語の文を理解し、それを全体として同じ意味の日本語の文に書き換えるというのはそれほど難しいことではなかつた。しかしそれによってツヴァイクの本来の文体から離れすぎてしまうことは可能な限り避けた。ツヴァイクが彼らしくリズムカルな文章の中で同じような意味の表現を繰り返しているときには、私もその表現の一つ一つに違う言葉を探さなければならない。彼が三つの形容詞で書いていることは、私も三つの語でしか言うことができない。そしてさらに問題なのは文章の長さである。ドイツ語では性や格があることによって、かなり長い文でも正確に理解することができる。これに対して日本語の文は、

少し長くなるとすぐに曖昧でわかりにくいものになってしまう。複雑で不明瞭な文章はもはやシュテファン・ツヴァイクとは言えない。翻訳というのは実に、おのれの言語の限界および可能性との格闘に他ならないのだ。

歴史的背景と「異質なもの」

「チェス奇譚」に関して言うと、日本ではその歴史的背景がよく知られているとは言えない。アンシュルス（オーストリア併合）についても大半の日本人はほとんど知らない。もちろん、このような小説を楽しむのに多くの知識が必要だとは思わない。私自身の知識も初めて読んだときには非常に乏しいものだった。しかし全く何も知らなければ、B 博士が体験したことの意味も、また（作者同様に）亡命者であるかもしれない語り手の存在についても、十分に理解することはできまい。そのため私は注釈でアンシュルスに関する歴史的事実、そして登場する、あるいは名前が出てくる歴史的人物について説明を加えた。

歴史的背景を知らないような小説を読むことに消極的な人もいる。しかし私にとっては、外国文学を読む上での最高の楽しみの一つは、それまで知らなかった時代や場所に出会い、人々の心理を理解するということであり、ツヴァイクのような優れた語り手を得ればなおさらである。同様のことは言語そのものについても言える——つまり異質なもの(*das Fremde*)の重要性である（異様なもの(*die Fremdheit*)ではなく——ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの翻訳論の表現を借りるならば)。外国語の作品を「まるで我々の母語で書かれたものであるかのように」、つまり何の引っ掛かりも不可思議さもなく読めるようにしてくれる翻訳が最良の翻訳だとは、私は思わない。若い頃に自ら翻訳者でもあったツヴァイクは、異質なものとの取り組みを通して新たな言語の世界を現出させること、それを読み楽しむことの喜びをよくよく知っていたことだろう。

ツヴァイクと今日の世界

小説の後にはかなり長い後書きを書くことが許されたので、私はツヴァイクの生涯と、博士論文でも扱った「内面の自由」の理念について説明した。さらに二つの小説の成立の背景、そして私の解釈も述べた。そして同時代的なテーマにも触れた。「過去への旅」で戦争によってメキシコとドイツの間に引き裂かれるルートヴィヒと恋人のように、我々もつい最近未曾有のパンデミックによって長い間引き離されることになった。まさに「何百万という無力な人々が運命の牢獄の壁に向かって怒りをぶつけていた」のである。そして「チェス奇譚」の B 博士のように、我々もまた長いこと閉じ込められ、灰色の孤独のうちに日々を送らなければならなかった。この後書きを書きながら私は、ツヴァイクの言葉の持つアクチュアリティに改めて驚かされた。彼はもっと広く読まれる可能性を持っているし、今こそ読まれなけれ

ばならないと確信した——我々の国においても。

訳出した二つの小説はいずれも悲観的な結末となっている（そのペシミズムはあるいは、自死に際してツヴァイクの心をも占めていたものだったのかもしれない）。しかし私は最後に彼から希望の言葉をも受け取るべきだと思った。そこで私はこの本を以下の引用で締めくくった。

まず暗くならなければ、不滅の星々がいかに素晴らしく頭上に輝いているかということに我々は気づきません。それと同様に、まずこの暗いひと時が、ことによれば歴史上もつとも暗いひと時がやってこなければならなかったのです—それによって我々が、呼吸を身体から切り離せないように、自由を我々の魂から奪い去ることもできないのだということを知るために。[……] ですから結束して、我々の仕事、我々の生をもって、この責務を果たしていこうではありませんか、各々が自らの言語で、各々が自らの国のために。この暗いひと時において、おのれ自身に、そしてまた互いに対して誠実であってこそ、我々は名誉をもって使命を果たしたと言えることになるでしょう。

（シュテファン・ツヴァイク「この暗いひと時に」1941年）

『過去への旅／チェス奇譚』は2021年6月に出版された。この一巻が、日本の人々に偉大なオーストリアの作家シュテファン・ツヴァイクと知り合い、彼の文学の魅力を体験してもらうためのささやかな一助となることを願っている。